寶袋

白山生

先づ或處に太郎と次郎と三郎の三人がありました或日のこと、今しも三人が學校から歸つて來た處がお父樣が旅から御歸りでお土產を下さると云ふ所でした。三人は大悅びでお父樣の傍へ參りました。それでお父樣は鞄の中から大きな風呂敷包みを御出しになつて三人の前へと之をお擴げなさいました。見ると軍艦やら、人形やら電車やら滊車やらそれは〳〵は澤山なおもちやが山の樣に出ましたので三人はまだ貰はないうちから微笑〳〵もので、何れが私のかしらん。あれを下さればよいがな？。などと考へながら早く持ちたくてウヅ〳〵して居りました。

スルと頓てのこと、お父樣はにこ〳〵しながら

父「どうだね、澤山あるだらう。みんなはお父さんのお留守の中に泣きましたか？母さまのお仰ることを能く守りましたか？若し泣いたり、云ふ

こと聞かなかつたりした人には後で返して貰ひますよ。先づ御約束をして置いて太郎さんから順々に上げ樣かね、太郎は何がよいかね。

太郎「僕は軍艦が好きです。軍艦を下さい。」

父「そう？夫れではお前には軍艦夫れからモーいらないかね？」

太郎「こんどは喇叭を下さい。」

父「ハイ〳〵、夫れきりかね」

太郎「夫れでは、今度はサーベルがほしい」

父「宜しいサア、サーベル、夫れで宜しかね」

太郎「モット下さい、今度は帽子を下さい。海軍士官の帽子を」

父「ハイ〳〵、夫れ是が海軍の帽子、夫れでおしまいかね」

太郎「いゝえ、お父さんモット下さい。水雷艇を下さい」

父「水雷艇？ハテ水雷艇があつたかしら、何れ〳〵、アゝ、あつた〳〵？夫れ水雷艇連

號かな、ヲ、立派だな、是もお前のか、是れで幾つだえ、一つ二つ三つ四つ五つ、ヲヤ五つあるよ、モーヨカローこんどは次郎の番だ何がい、ね。

次郎「僕はね、エート人形ッ！」

次「人形？女の子見た樣だな。宜しい、それ人形！可愛らしいだらう？夫れから何かね」

次郎「それから太砲と算盤〳〵鍬

父「オヤ〳〵軍の道具と商ひの道具とそれからお百性の道具か、ヨシ〳〵夫れ大砲と算盤、ヲヤ鍬がないよ、ヤ何處へか落したかしらイヤ落ちる筈はない、鞄の中だから」

と父さんはキョロ〳〵そこらを探して居る

次郎「お父さん此處にありますよ」

と疾くの昔に次郎さんちやんと手に持つて居る

父「アヽお前が持つて居たのか、どうりで判らなかつた。ヨシ〳〵それではお前はもうおしまいかね」

次郎「イーエお父さん兄さんも澤山戴いたから僕にもモット下さい」

父「ウ、そーか、夫れでは今度は何が欲しいかね？

次郎「是と是がいヽ」

父「何？コレト〳〵と云ふのは？」

と見ると次郎の欲の深いことー右の手にきれいな手帳、左の手には立派な滊車、流石のお父さんも呆れて暫くは開いた口がふさがらない。やがて

父「ヲヤ〳〵〳〳〳〳〳〳〳〳次郎の欲の深いことと仰ると傍で見て居らしつたお母さまも喫驚して、

母「コレハ驚いた。次郎さん欲が深いね、一体幾つあるの？

と聞きになつた

次郎は氣がついて勘定して見ると先づ一番始めが人形それから大砲、それから算盤、それから鍬、其次が手帳と滊車都合殘らずて六つ、兄さんよりも一つ多い成程、次郎は欲ばりだ。

太郎が五つ次郎六つ、大きな風呂敷の中のおもちやも大抵無くなつて後にはあんまりきれいでもない電車がたつた一つ、おまけに此電車には救助網がない之を見たお父さんは

父「ヲヤ〳〵三郎に遣るが唯つた一つになつてしまつた三郎！コレいやかね、」

とお仰つてソット三郎の顔を御覽なさると三郎は平氣なもの、

三郎「エ僕、電車好きです、ソレ頂戴、僕是一つで澤山です、お父さん此電車に此間破れた電車の救助網ね、アレつけられるでせう、ソーすればいゝでせう？

とモー何もかも忘れて一人嬉しそうにおもちやばこを取り行きました是を見たお父さんとお母さんは然も感心したと云ふ風で其後姿を見て居らしつたが頓がてのことお母さまは

母「三郎は豪傑になりそーですね」

とお仰るとお父様も何か頻り考へながらコックリを爲さつて頓がて又

父「ウーえらい奴だぞ」

とお仰つた。

此間大きい兄さんは皿の樣な眼を開いてヂーッとお父さんや母さんのお顔を見比らべながら心の中で

太郎「アゝ僕が惡かつた、僕が兄さんの僻に慾ばつたものだから、次郎さんも慾ばつて、遂々三郎さんのがなくなつたんだ。

これからもー慾ばるのはよしませう。」

と悧巧な兄さんは氣が付ました。が一人何も知らないで慾ばつた人形や鍬や手帳をそこに並べて遊び方に困つて居たのは次郎さんでありました。

そうこうする中に晩の御飯になつて冬の短ひ日は暮れて太郎次郎三郎の三人は頓がて枕を並べて寢てしまいました。

續いてお父さんもお寢みになり下女も書生もみんな寢でしまい一番おそいお母さんもお寢みなりま

したので家の中は唯あつちにもこつちにもグーグーと云ふいびきの聲ばかり

稍暫くは時計のカチ〳〵がさは立つて聞えて居りましたが、不意に何處からともなく可愛らしい子供の話し聲がしました。

甲「君、いゝあんばい皆、寢て居ますよ、早く來て御覽なさい。あれが三郎でせう？、」

乙「なる程、いゝ子ね、そうつと起しませうか」

甲「いえ起すの止しませうよ。外のものが起きるといけませんから、それよりもそうつと寶袋へ戴せて擔架にして行きませう！」

乙「アヽ、それぢやそうしませう」

スルト天井から不意にバサ〳〵と云ふ風音がしたかと思ふと十歳ばかりになるむく〳〵と肥つた何とも云へない可愛らしい男の子そして不思議にも肩の處から羽根が生へて居る男の子が二人飛ひ下りました。そして一人の子が抱へて居たきれいな風呂敷見た樣なものを其處へ廣げて今度は隣の室からそうつと寢て居た三郎を二人で抱へて來て其上に載せて、それから、一人が頭の方、一人が足の方の四角を持つて何處ともなく音も立てずに連れて行つてしまひました。

* * * * *

寢て居た三郎は何も氣がつかずに居ましたが餘り子供の聲がするので、フト眼を開いて見るとマアア不思議なことには何時の間に來たのか廣いきれいなそして芝が一杯に生えて居る御殿のお庭の樣な處に居ました見ると向ふの方にはいろ〳〵なきれいな花が咲いて居て白い蝶々や黃色い蝶々が麗かな太陽にひら〳〵と舞ふて居ます。こつちの方を見ると赤や白の菊の花が一杯咲いて居る花壇の傍の砂場の處には見たことのない子供然も羽根の生えた可愛らしいはだかの子供が二人で何か面白そうにキャッ〳〵と笑ひながら遊んで居ますので三郎は我知らず其方に進んで行くと一人の子供は

甲「三郎さん、手傳つてお呉れよ今トンネルを造

へるのだから」

と云ふ其聲がまことにピアノの樣なされいな聲です。

三郎は負けぬ氣になつて土を堀つたり土堤を築いたりして漸つとのことでトンネルが出來、滊車も出來ました。二人の子供は積木の滊車を押して悅んで遊んで居りましたが物足りないことには唱歌を歌ひません。けれど三郎は幼稚園で敎つたものですから小さな聲で

笛の合圖に動き出す滊車は見る間に早や十里
道行く人も木も家も後に走る面白さ
後に過れば又前に來たるあまたのステーション

二人の子供は是を聞くや否や

甲「ヤ、君は唱歌が上手ですね、僕にも敎へて吳れ給へ」

と云ふと今一人の子も

乙「ソーダ、僕にも敎へて下さい、寶袋つていゝもの上げるから」

と云ひますので三郎は幼稚園で敎つた秋の野の歌を聲朗かに

もみぢはにしき稻穗は黃金
秋の野山は美事ながめ
此處にはささやうそこにはすゝき
椎の實樫の實熟し柿
草花つみて木の實を拾ひ
家の母さんにお土產しませう

と唱つて敎へて遣りますと二人の子供は直に覺えていゝ聲で歌つて居りました。暖かな太陽が背中をぬくめ耳にはきれいな唱歌を聞て居ましたので何時の間にか三郎は芝生の上に寢てしまいましたいゝ心持で寢て居ると母樣のお聲で

母「三郎や。ソロ〳〵お起きなさいよ幼稚園が遲くなりますよ」

云ふので驚いて眼を開くと何時もの通り三郎は自分のお室で何時もの通りの夜具の中に寢て居ました。三郎は

三郎「はてな、昨夕の子は何處へ行つたらう、夢であつたかしら、寶袋を何うとか云つたつけ、何のことだつけかしら」

と思ひながら頭を上げると枕元にされいな大きな袋が一つありました。三郎は

三郎「オヤ變な袋があるよ何だらう」

と思ひながら起き上つて着物を着代へ顔を洗つたり御飯を頂いたりしてから其袋を能く見ましたが何のこともありません唯きれいな大きな空つぽな袋でした。こんな袋置いた覺えはありませんので如何にも不思議ですからお父さまにお眼に掛けると

父「ウー、コレハ不思議ぢや、

とお仰しやる、母様も

母「一体まあ何うしたんでせう」

と仰しやる。そこで三郎は夢のことをお話しますと仰りながら一枚の紙を袋の中から見付けなさいました其紙には

「此寶袋は不思議な袋で三郎のほしがるおもちやは何んでも出る樣になつて居ます。」

と斯う書いてありました。

三郎は大喜びで試めしに袋の中へ手を入れながら

三郎「僕は兄さんの樣な軍艦がほしい」

と云ふと袋の底の方が急に重くなつて丁度兄さまが持つて御出での位な軍艦が出ました

三郎は

三郎「ア、出た〳〵、序に水雷艇が出ればいゝな

と云ふか云はぬ中に立派な水雷艇が一つ出て來ました。それから出るは〳〵色々のおもちやが澤山に出て來ましたので御座敷はまるでおもちや屋の樣になりました。めでたし〳〵〳〵〳〵